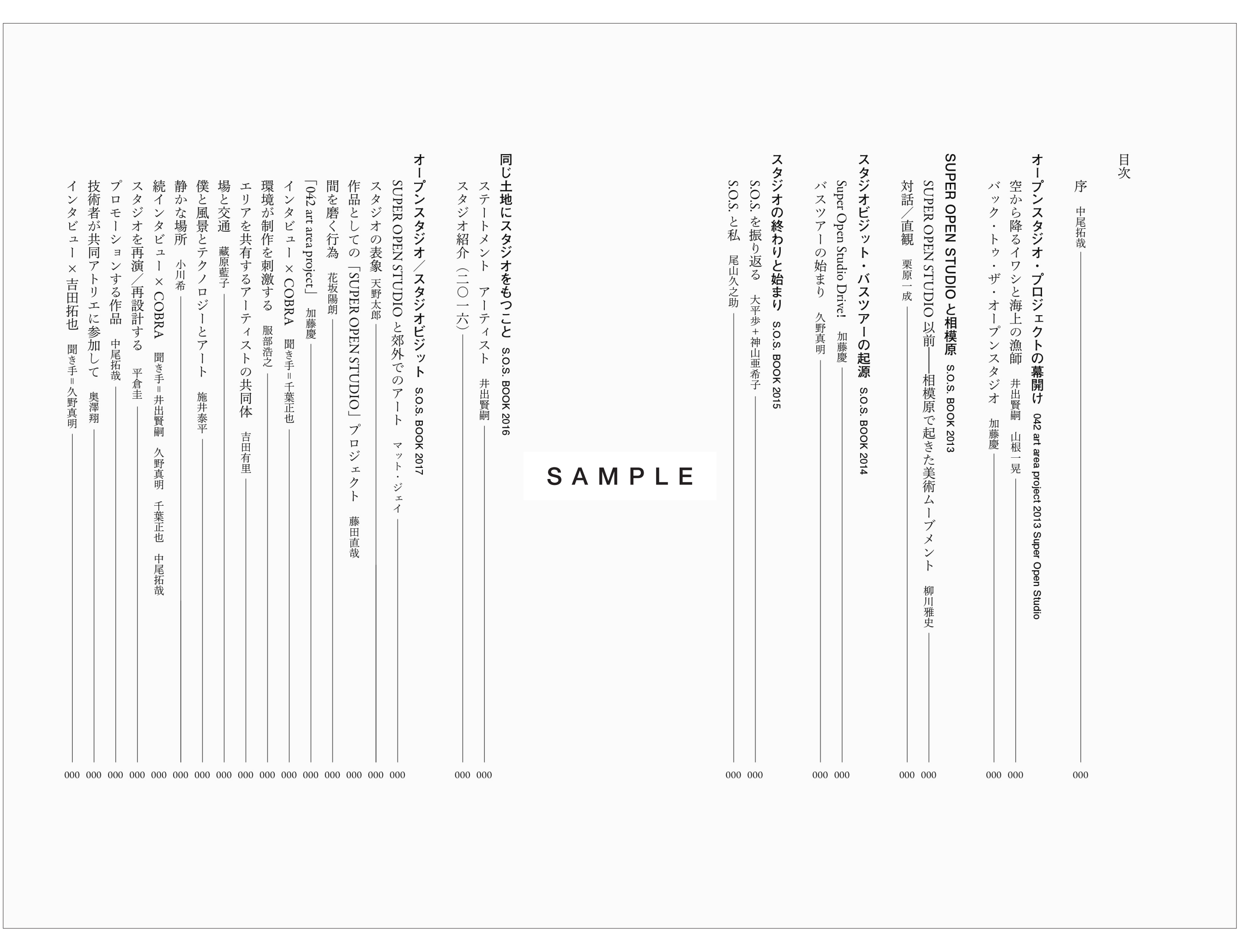
S.O.S. BOOK 2013-2023 書籍化プロジェクト

中尾拓哉 編
SUPER OPEN STUDIO 2023実行委員会 発行
限定500部　3,000円（税抜）
2024年初め頃発売予定

『S.O.S. BOOK』は、2016年から発行している「S.O.S.」のために編まれた「BOOK」です。これまで、スタジオ＋作家紹介（2016年）、有識者による論集（2017年）、海外向けの英語冊子（2018年）、参加アーティスト全員へのアンケート調査（2019年）、オンラインイベントの記録集（2020年）、WEB写真集（2021年）、さらに未発行であったS.O.S. 2013〜2015を振り返る10周年記念直前号（2022年）と、趣向を変えながら毎年出版してきました。そして2023年、S.O.S.の10周年を記念して、これまで発行してきた10冊の『S.O.S. BOOK』をまとめた書籍を制作します。

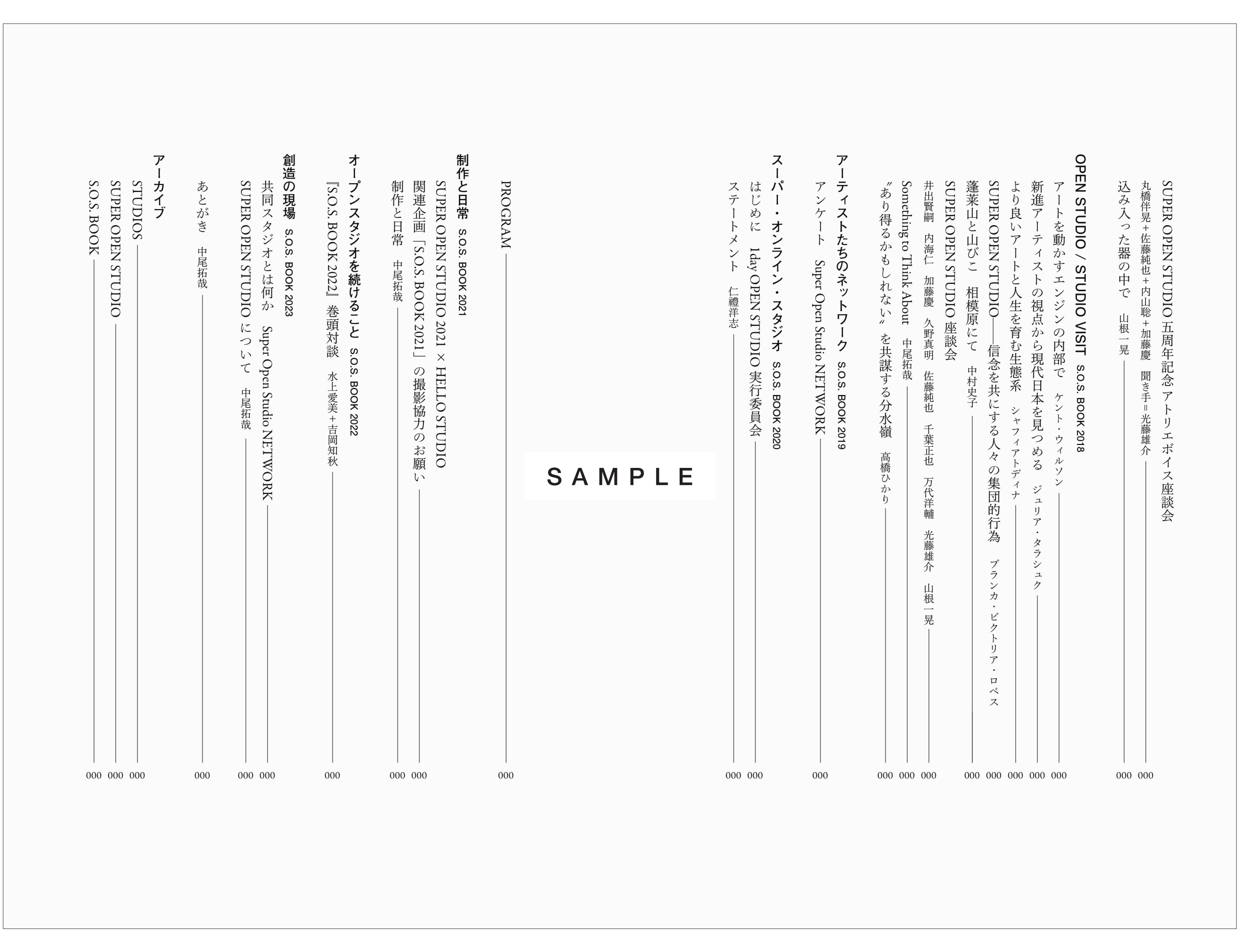
S.O.S. BOOK
2015
S.O.S. BOOK
スタジオの終わり
SOSBOOK 2016
S.O.S. BOOK
S.O.S. BOOK
S.O.S. BOOK

四六判　上製本　512ページ（予定）

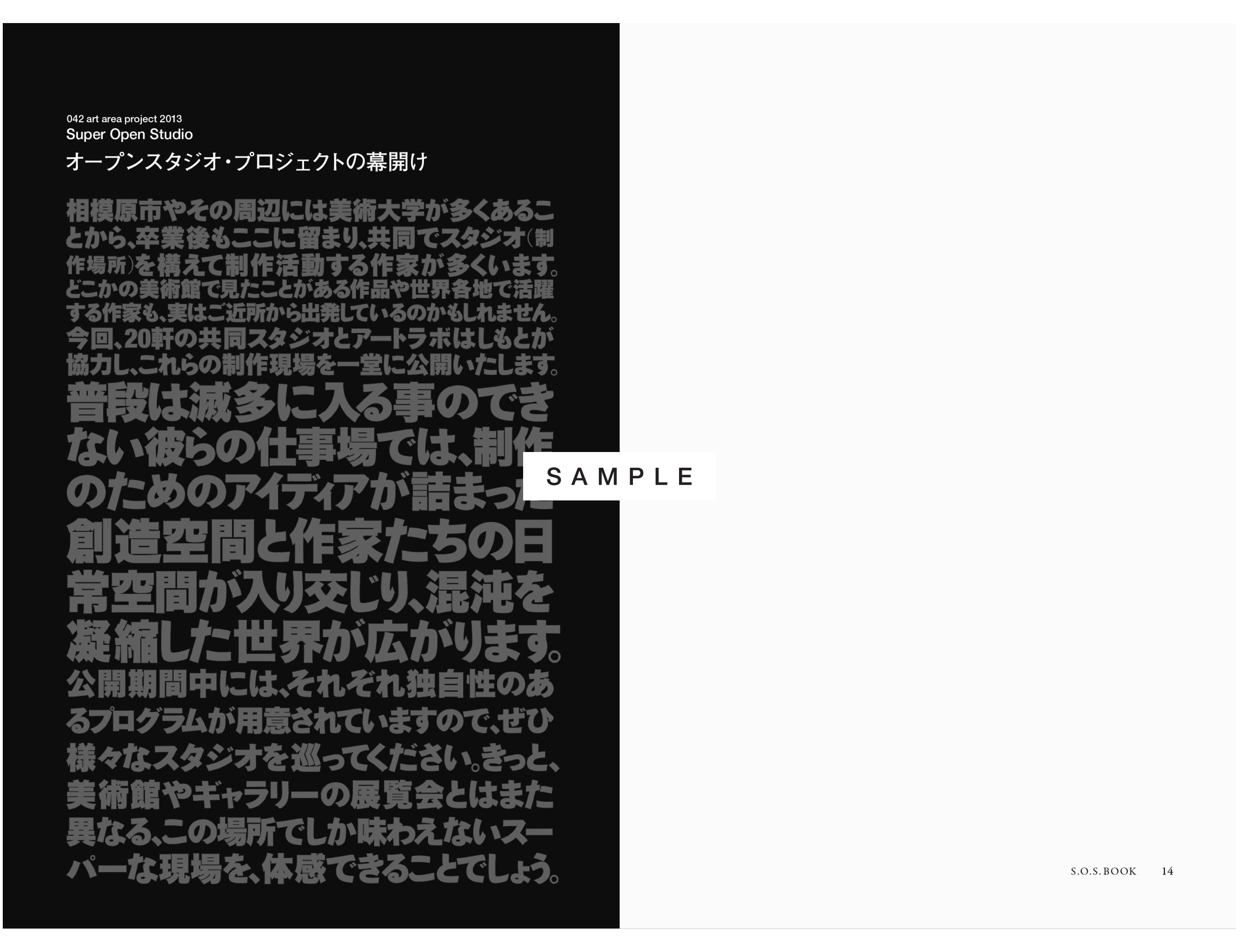


目次

序　中尾拓哉　000
オープンスタジオ・プロジェクトの幕開け　042 art area project 2013 Super Open Studio
空から降るイワシと海上の漁師　井出賢嗣　山根一晃　000
バック・トゥ・ザ・オープンスタジオ　加藤慶　000
SUPER OPEN STUDIOと相模原　S.O.S. BOOK 2013
SUPER OPEN STUDIO以前——相模原で起きた美術ムーブメント　柳川雅史　000
対話／直観　栗原一成　000
スタジオビジット・バスツアーの起源　S.O.S. BOOK 2014
Super Open Studio Drive!　加藤慶　000
バスツアーの始まり　久野真明　000
スタジオの終わりと始まり　S.O.S. BOOK 2015
S.O.S.を振り返る　大平歩＋神山亜希子　000
S.O.S.と私　尾山久之助　000
同じ土地にスタジオをもつこと　S.O.S. BOOK 2016
ステートメント　アーティスト　井出賢嗣　000
スタジオ紹介（二〇一六）　000
オープンスタジオ／スタジオビジット　S.O.S. BOOK 2017
SUPER OPEN STUDIOと郊外でのアート　マット・ジェイ　000
スタジオの表象　天野太郎　000
作品としての「SUPER OPEN STUDIO」プロジェクト　藤田直哉　000
間を磨く行為　花坂陽朗　000
［042 art area project］　加藤慶　000
インタビュー × COBRA　聞き手＝千葉正也　000
環境が制作を刺激する　服部浩之　000
エリアを共有するアーティストの共同体　吉田有里　000
場と交通　蔵原藍子　000
僕と風景とテクノロジーとアート　施井泰平　000
静かな場所　小川希　000
続インタビュー × COBRA　聞き手＝井出賢嗣　久野真明　千葉正也　中尾拓哉　000
スタジオを再演／再設計する　平倉圭　000
プロモーションする作品　中尾拓哉　000
技術者が共同アトリエに参加して　奥澤翔　000
インタビュー × 吉田拓也　聞き手＝久野真明　000



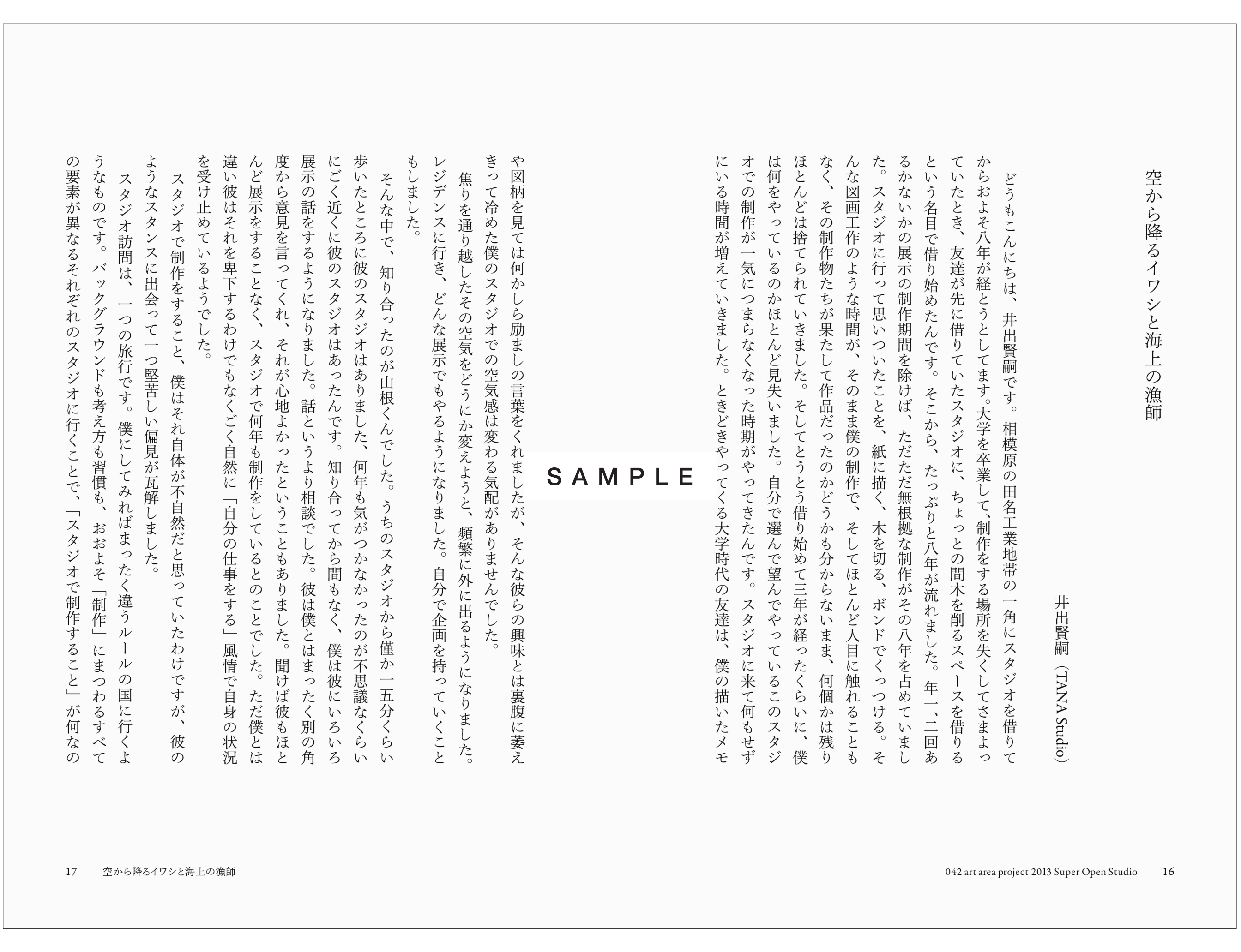
SUPER OPEN STUDIO五周年記念アトリエボイス座談会　丸橋伴見＋佐藤純也＋内山聡＋加藤慶　聞き手＝光藤雄介　000
込み入った器の中で　山根一晃　000
OPEN STUDIO / STUDIO VISIT　S.O.S. BOOK 2018
アートを動かすエンジンの内部で　ケント・ウィルソン　000
新進アーティストの視点から現代日本を見つめる　ジュリア・タラシュク　000
より良いアートと人生を育む生態系　シャフィアトディナ　000
SUPER OPEN STUDIO——信念を共にする人々の集団的行為　ブランカ・ビクトリア・ロペス　000
蓬莱山と山びこ　相模原にて　中村史子　000
SUPER OPEN STUDIO座談会
井出賢嗣　内海仁　加藤慶　久野真明　佐藤純也　千葉正也　万代洋輔　光藤雄介　山根一晃　000
Something to Think About　中尾拓哉　000
“あり得るかもしれない”を共謀する分水嶺　高橋ひかり　000
アーティストたちのネットワーク　S.O.S. BOOK 2019
アンケート　Super Open Studio NETWORK　000
スーパー・オンライン・スタジオ　S.O.S. BOOK 2020
はじめに　1day OPEN STUDIO実行委員会　000
ステートメント　仁禮洋志　000
PROGRAM　000
制作と日常　S.O.S. BOOK 2021
SUPER OPEN STUDIO 2021 × HELLO STUDIO関連企画「S.O.S. BOOK 2021」の撮影協力のお願い　000
制作と日常　中尾拓哉　000
オープンスタジオを続けること　S.O.S. BOOK 2022
『S.O.S. BOOK 2022』巻頭対談　水上愛美＋吉岡知秋　000
創造の現場　S.O.S. BOOK 2023
共同スタジオとは何か　Super Open Studio NETWORK　000
SUPER OPEN STUDIOについて　中尾拓哉　000
あとがき　中尾拓哉　000
アーカイブ
STUDIOS　000
SUPER OPEN STUDIO　000
S.O.S.BOOK　000



042 art area project 2013
Super Open Studio
オープンスタジオ・プロジェクトの幕開け

相模原市やその周辺には美術大学が多くあることから、卒業後もここに留まり、共同でスタジオ（制作場所）を構えて制作活動する作家が多くいます。どこかの美術館で見たことがある作品や世界各地で活躍する作家も、実はご近所から出発しているのかもしれません。今回、20軒の共同スタジオとアートラボはしもとが協力し、これらの制作現場を一堂に公開いたします。普段は滅多に入る事のできない彼らの仕事場では、制作のためのアイディアが詰まった創造空間と作家たちの日常空間が入り交じり、混沌を凝縮した世界が広がります。公開期間中には、それぞれ独自性のあるプログラムが用意されていますので、ぜひ様々なスタジオを巡ってください。きっと、美術館やギャラリーの展覧会とはまた異なる、この場所でしか味わえないスーパーな現場を、体感できることでしょう。

S.O.S.BOOK　14



空から降るイワシと海上の漁師

井出賢嗣（TANA Studio）

どうもこんにちは、井出賢嗣です。相模原の田名工業地帯の一角にスタジオを借りてからおよそ八年が経とうとしてます。大学を卒業して、制作をする場所を失くしてさまよっていたとき、友達が先に借りていたスタジオに、ちょっとの間木を削るスペースを借りるという名目で借り始めたんです。そこから、たっぷりと八年が流れました。年一、二回あるかないかの展示の制作期間を除けば、ただただ無根拠な制作がその八年を占めていました。スタジオに行って思いついたことを、紙に描く、木を切る、ボンドでくっつける。そんな図画工作のような時間が、そのまま僕の制作で、そしてほとんど人目に触れることもなく、その制作物たちが果たして作品だったのかどうかも分からないまま、何個かは残りほとんどは捨てられていきました。そしてとうとう借り始めて三年が経ったくらいに、僕は何をやっているのかほとんど見失いました。自分で選んで望んでやっているこのスタジオでの制作が一気につまらなくなった時期がやってきたんです。スタジオに来て何もせずにいる時間が増えていきました。ときどきやってくる大学時代の友達は、僕の描いたメモや図柄を見ては何かしら励ましの言葉をくれましたが、そんな彼らの興味とは裏腹に萎えきって冷めた僕のスタジオでの空気感は変わる気配がありませんでした。

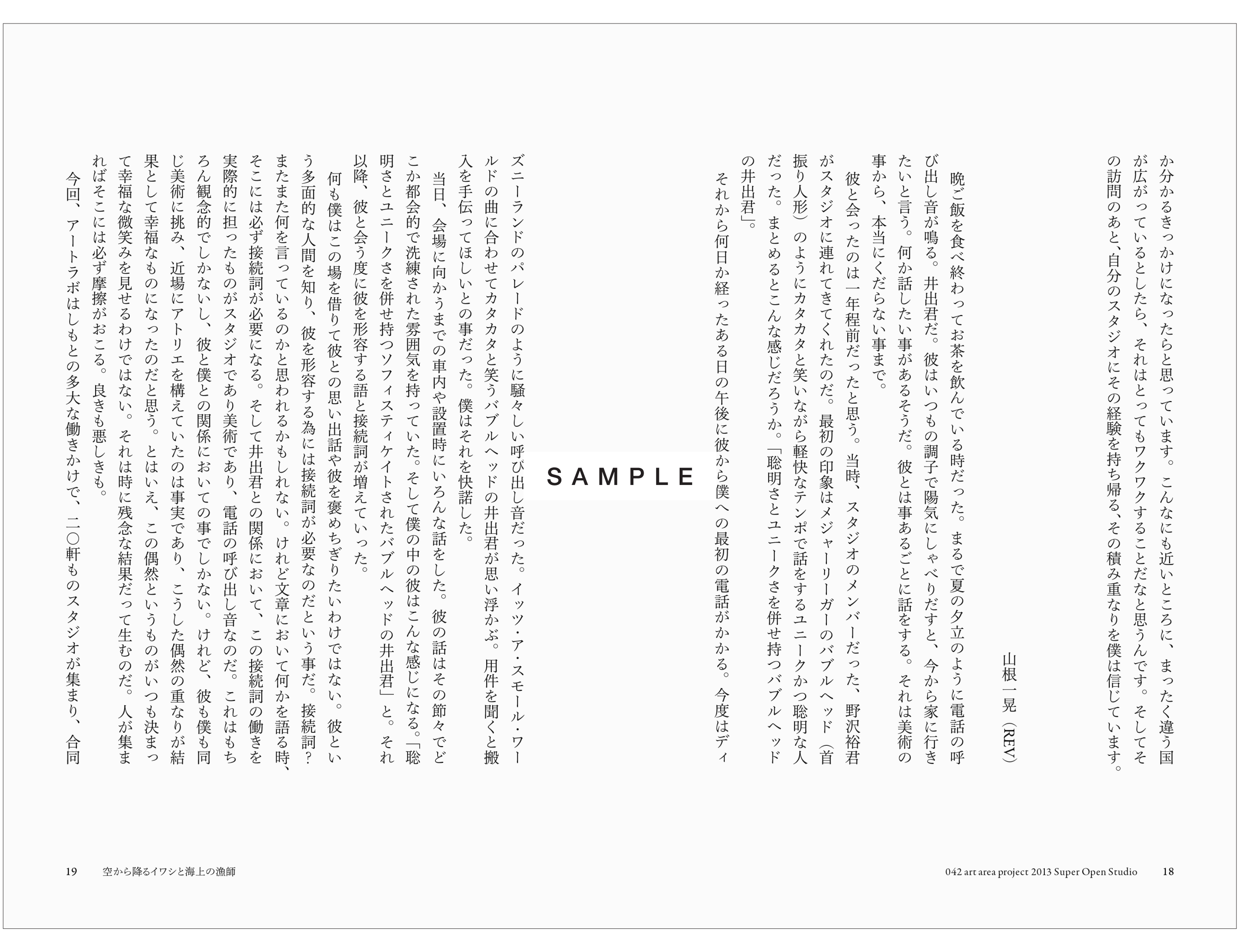
焦りを通り越したその空気をどうにか変えようと、頻繁に外に出るようになりました。レジデンスに行き、どんな展示でもやるようになりました。自分で企画を持っていくこともしました。

そんな中で、知り合ったのが山根くんでした。うちのスタジオから僅か一五分くらい歩いたところに彼のスタジオはありました、何年も気がつかなかったのが不思議なくらいにごく近くに彼のスタジオはあったんです。知り合ってから間もなく、僕は彼にいろいろ展示の話をするようになりました。話というより相談でした。彼は僕とはまったく別の角度から意見を言ってくれ、それが心地よかったということもありました。聞けば彼もほとんど展示をすることなく、スタジオで何年も制作をしているとのことでした。ただ僕とは違い彼はそれを卑下するわけでもなくごく自然に「自分の仕事をする」風情で自身の状況を受け止めているようでした。

スタジオで制作をすること、僕はそれ自体が不自然だと思っていたわけですが、彼のようなスタンスに出会って一つ堅苦しい偏見が瓦解しました。

スタジオ訪問は、一つの旅行です。僕にしてみればまったく違うルールの国に行くようなものです。バックグラウンドも考え方も習慣も、おおよそ「制作」にまつわるすべての要素が異なるそれぞれのスタジオに行くことで、「スタジオで制作すること」が何なの

042 art area project 2013 Super Open Studio　16
17　空から降るイワシと海上の漁師



か分かるきっかけになったらと思っています。こんなにも近いところに、まったく違う国が広がっているとしたら、それはとってもワクワクすることだなと思うんです。そしてその訪問のあと、自分のスタジオにその経験を持ち帰る、その積み重なりを僕は信じています。

山根一晃（REV）

晩ご飯を食べ終わってお茶を飲んでいる時だった。まるで夏の夕立のように電話の呼び出し音が鳴る。井出君だ。彼はいつもの調子で陽気にしゃべりだすと、今から家に行きたいと言う。何か話したい事があるそうだ。彼とは事あるごとに話をする。それは美術の事から、本当にくだらない事まで。

彼と会ったのは一年程前だったと思う。当時、スタジオのメンバーだった、野沢裕君がスタジオに連れてきてくれたのだ。最初の印象はメジャーリーガーのバブルヘッド（首振り人形）のようにカタカタと笑いながら軽快なテンポで話をするユニークかつ聡明な人だった。まとめるとこんな感じだろうか。「聡明さとユニークさを併せ持つバブルヘッドの井出君」。

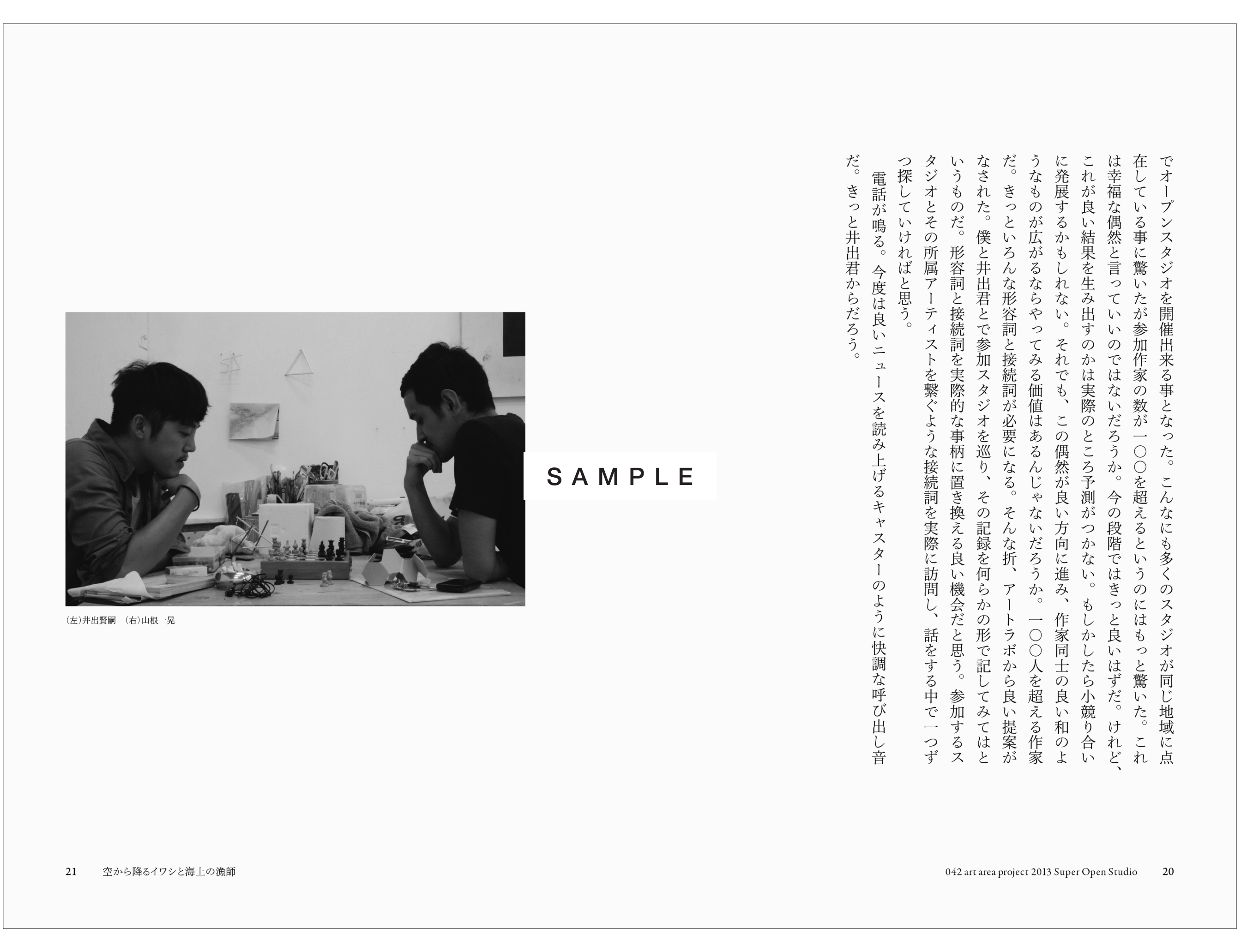
それから何日か経ったある日の午後に彼から僕への最初の電話がかかる。今度はディズニーランドのパレードのように騒々しい呼び出し音だった。イッツ・ア・スモール・ワールドの曲に合わせてカタカタと笑うバブルヘッドの井出君が思い浮かぶ。用件を聞くと搬入を手伝ってほしいとの事だった。僕はそれを快諾した。

当日、会場に向かうまでの車内や設置時にいろんな話をした。彼の話はその節々でどこか都会的で洗練された雰囲気を持っていた。そして僕の中の彼はこんな感じになる。「聡明さとユニークさを併せ持つソフィスティケイトされたバブルヘッドの井出君」と。それ以降、彼と会う度に彼を形容する語と接続詞が増えていった。

何も僕はこの場を借りて彼との思い出話や彼を褒めちぎりたいわけではない。彼という多面的な人間を知り、彼を形容する為には接続詞が必要なのだという事だ。接続詞？　またまた何を言っているのかと思われるかもしれない。けれど文章において何かを語る時、そこには必ず接続詞が必要になる。そして井出君との関係において、この接続詞の働きを実際的に担ったものがスタジオであり美術であり、電話の呼び出し音なのだ。これはもちろん観念的でしかないし、彼と僕との関係においての事でしかない。けれど、彼も僕も同じ美術に挑み、近場にアトリエを構えていたのは事実であり、こうした偶然の重なりが結果として幸福なものになったのだと思う。とはいえ、この偶然というものがいつも決まって幸福な微笑みを見せるわけではない。それは時に残念な結果だって生むのだ。人が集まればそこには必ず摩擦がおこる。良きも悪しきも。

今回、アートラボはしもとの多大な働きかけで、二〇軒ものスタジオが集まり、合同

042 art area project 2013 Super Open Studio　18
19　空から降るイワシと海上の漁師

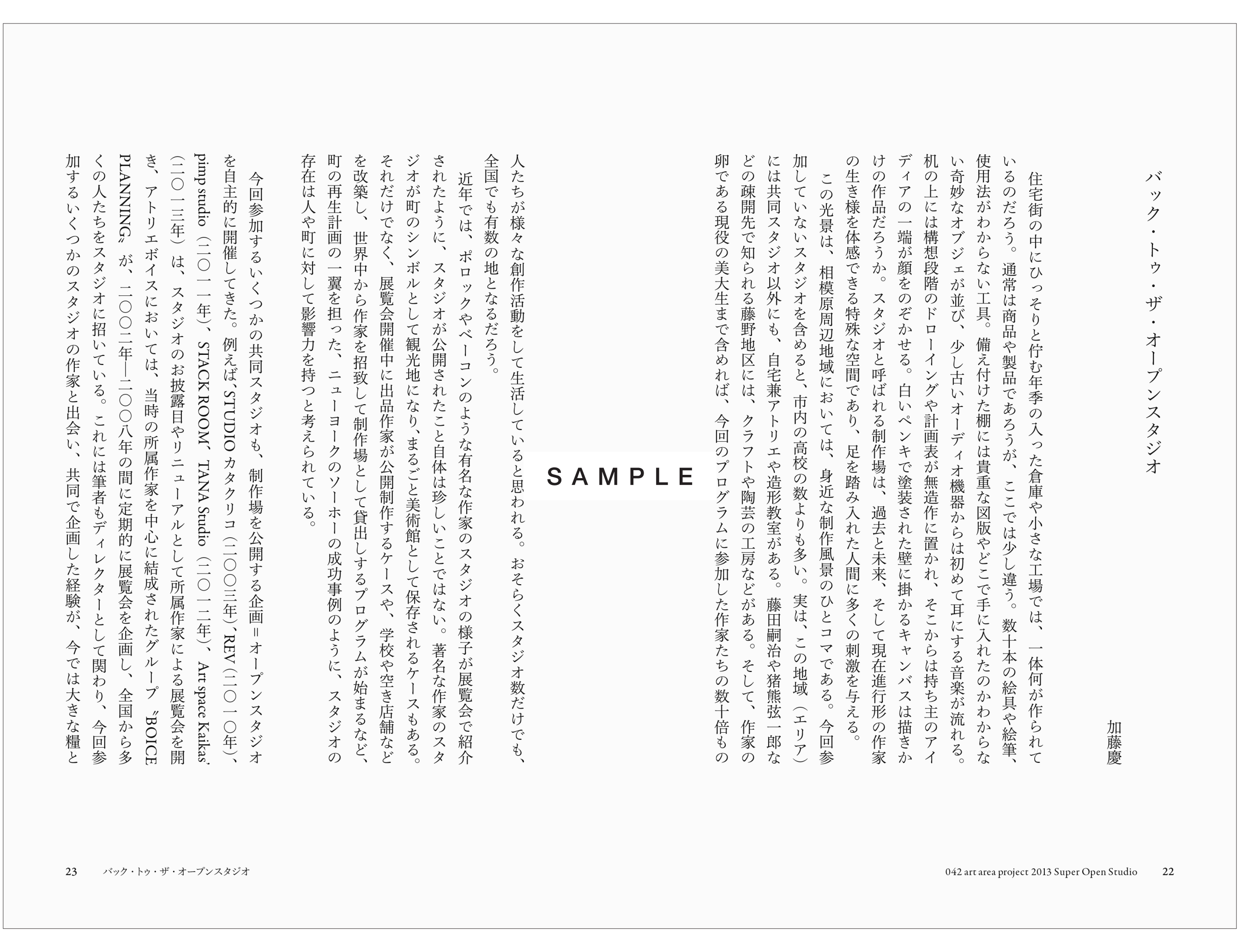


でオープンスタジオを開催出来る事となった。こんなにも多くのスタジオが同じ地域に点在している事に驚いたが参加作家の数が一〇〇を超えるというのにはもっと驚いた。これは幸福な偶然と言っていいのではないだろうか。今の段階ではきっと良いはずだ。けれど、これが良い結果を生み出すのかは実際のところ予測がつかない。もしかしたら小競り合いに発展するかもしれない。それでも、この偶然が良い方向に進み、作家同士の良い和のようなものが広がるならやってみる価値はあるんじゃないだろうか。一〇〇人を超える作家だ。きっといろんな形容詞と接続詞が必要になる。そんな折、アートラボから良い提案がなされた。僕と井出君とで参加スタジオを巡り、その記録を何らかの形で記してみてはというものだ。形容詞と接続詞を実際的な事柄に置き換える良い機会だと思う。参加するスタジオとその所属アーティストを繋ぐような接続詞を実際に訪問し、話をする中で一つずつ探していければと思う。

電話が鳴る。今度は良いニュースを読み上げるキャスターのように快調な呼び出し音だ。きっと井出君からだろう。

（左）井出賢嗣　（右）山根一晃

042 art area project 2013 Super Open Studio　20
21　空から降るイワシと海上の漁師



バック・トゥ・ザ・オープンスタジオ

加藤慶

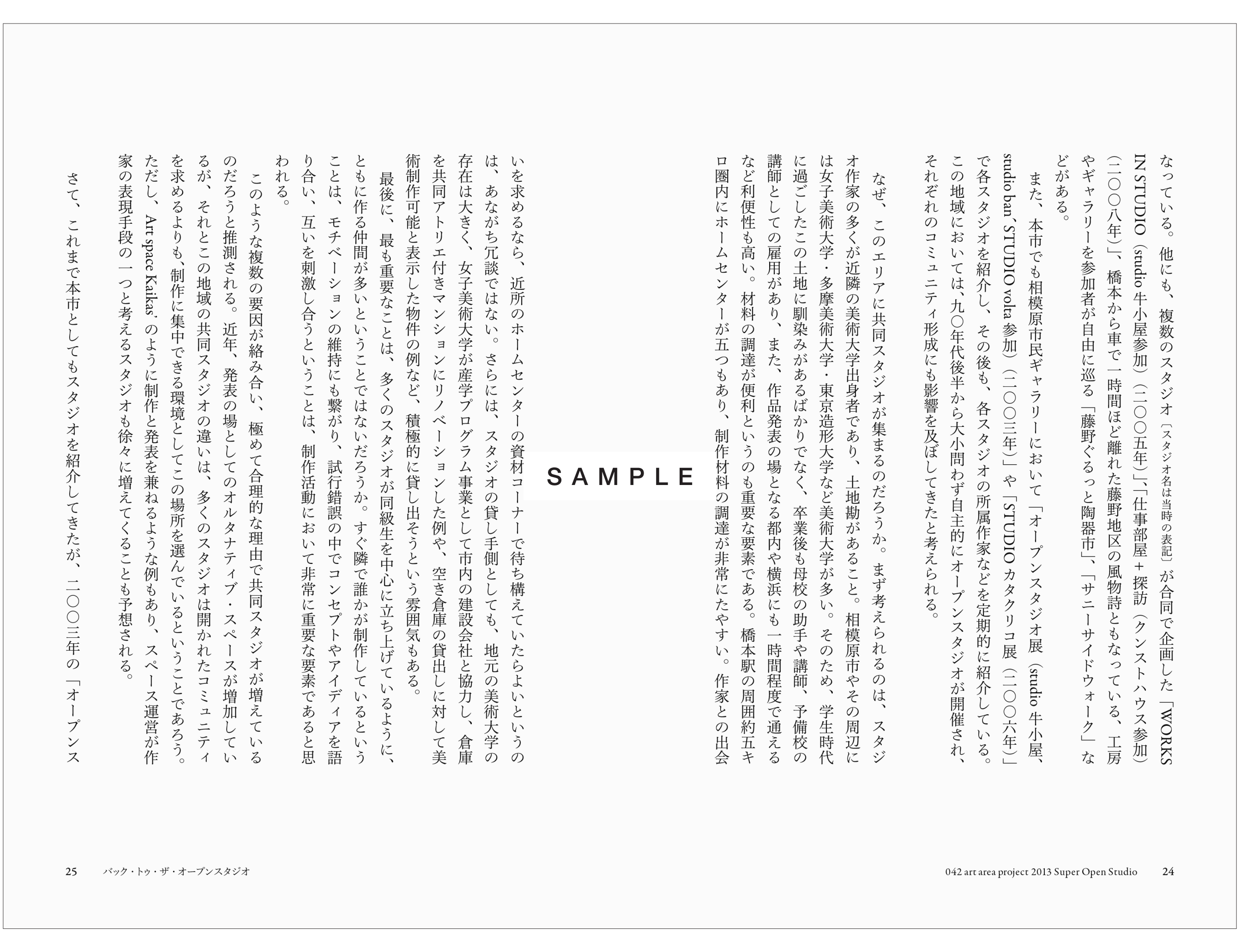
住宅街の中にひっそりと佇む年季の入った倉庫や小さな工場では、一体何が作られているのだろう。通常は商品や製品であろうが、ここでは少し違う。数十本の絵具や絵筆、使用法がわからない工具。備え付けた棚には貴重な図版やどこで手に入れたのかわからない奇妙なオブジェが並び、少し古いオーディオ機器からは初めて耳にする音楽が流れる。机の上には構想段階のドローイングや計画表が無造作に置かれ、そこからは持ち主のアイディアの一端が顔をのぞかせる。白いペンキで塗装された壁に掛かるキャンバスは描きかけの作品だろうか。スタジオと呼ばれる制作場は、過去と未来、そして現在進行形の作家の生き様を体感できる特殊な空間であり、足を踏み入れた人間に多くの刺激を与える。

この光景は、相模原周辺地域においては、身近な制作風景のひとコマである。今回参加していないスタジオを含めると、市内の高校の数よりも多い。実は、この地域（エリア）には共同スタジオ以外にも、自宅兼アトリエや造形教室がある。藤田嗣治や猪熊弦一郎などの疎開先で知られる藤野地区には、クラフトや陶芸の工房などがある。そして、作家の卵である現役の美大生まで含めれば、今回のプログラムに参加した作家たちの数十倍もの人たちが様々な創作活動をして生活していると思われる。おそらくスタジオ数だけでも、全国でも有数の地となるだろう。

近年では、ポロックやベーコンのような有名な作家のスタジオの様子が展覧会で紹介されたように、スタジオが公開されたこと自体は珍しいことではない。著名な作家のスタジオが町のシンボルとして観光地になり、まるごと美術館として保存されるケースもある。それだけでなく、展覧会開催中に出品作家が公開制作するケースや、学校や空き店舗などを改築し、世界中から作家を招致して制作場として貸出しするプログラムが始まるなど、町の再生計画の一翼を担った、ニューヨークのソーホーの成功事例のように、スタジオの存在は人や町に対して影響力を持つと考えられている。

今回参加するいくつかの共同スタジオも、制作場を公開する企画＝オープンスタジオを自主的に開催してきた。例えば〝STUDIO カタクリコ（二〇〇三年）〟、〝REV（二〇一〇年）〟、〝pimp studio（二〇一一年）〟、〝STACK ROOM〟、〝TANA Studio（二〇一二年）〟、〝Art space Kaikas〟（二〇一三年）は、スタジオのお披露目やリニューアルとして所属作家による展覧会を開き、アトリエボイスにおいては、当時の所属作家を中心に結成されたグループ〝BOICE PLANNING〟が、二〇〇二年—二〇〇八年の間に定期的に展覧会を企画し、全国から多くの人たちをスタジオに招いている。これには筆者もディレクターとして関わり、今回参加するいくつかのスタジオの作家と出会い、共同で企画した経験が、今では大きな糧と

042 art area project 2013 Super Open Studio　22
23　バック・トゥ・ザ・オープンスタジオ



なっている。他にも、複数のスタジオ（スタジオ名は当時の表記）が合同で企画した「WORKS IN STUDIO（studio 牛小屋参加）（二〇〇五年）」、「仕事部屋＋探訪（クンストハウス参加）（二〇〇八年）」、橋本から車で一時間ほど離れた藤野地区の風物詩ともなっている、工房やギャラリーを参加者が自由に巡る「藤野ぐるっと陶器市」、「サニーサイドウォーク」などがある。

また、本市でも相模原市民ギャラリーにおいて「オープンスタジオ展（studio 牛小屋、studio ban、STUDIO volta 参加）（二〇〇三年）」や「STUDIO カタクリコ展（二〇〇六年）」で各スタジオを紹介し、その後も、各スタジオの所属作家などを定期的に紹介している。この地域においては、九〇年代後半から大小問わず自主的にオープンスタジオが開催され、それぞれのコミュニティ形成にも影響を及ぼしてきたと考えられる。

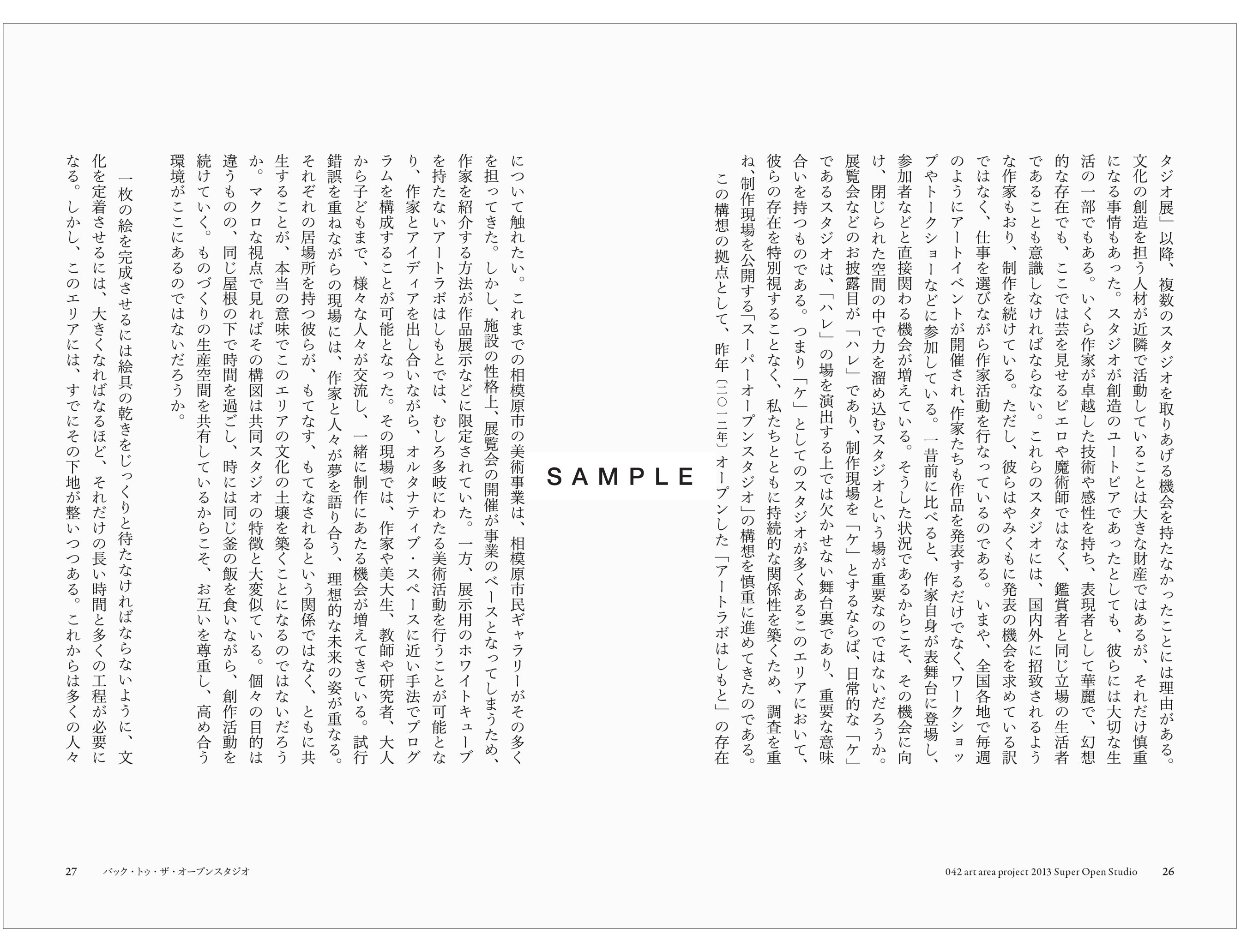
なぜ、このエリアに共同スタジオが集まるのだろうか。まず考えられるのは、スタジオ作家の多くが近隣の美術大学出身者であり、土地勘があること。相模原市やその周辺には女子美術大学・多摩美術大学・東京造形大学など美術大学が多い。そのため、学生時代に過ごしたこの土地に馴染みがあるばかりでなく、卒業後も母校の助手や講師、予備校の講師としての雇用があり、また、作品発表の場となる都内や横浜にも一時間程度で通えるなど利便性も高い。材料の調達が便利というのも重要な要素である。橋本駅の周囲約五キロ圏内にホームセンターが五つもあり、制作材料の調達が非常にたやすい。作家との出会いを求めるなら、近所のホームセンターの資材コーナーで待ち構えていたらよいというのは、あながち冗談ではない。さらには、スタジオの貸し手側としても、地元の美術大学の存在は大きく、女子美術大学が産学プログラム事業として市内の建設会社と協力し、倉庫を共同アトリエ付きマンションにリノベーションした例や、空き倉庫の貸出しに対して美術制作可能と表示した物件の例など、積極的に貸し出そうという雰囲気もある。

最後に、最も重要なことは、多くのスタジオが同級生を中心に立ち上げているように、ともに作る仲間が多いということではないだろうか。すぐ隣で誰かが制作しているということは、モチベーションの維持にも繋がり、試行錯誤の中でコンセプトやアイディアを語り合い、互いを刺激し合うということは、制作活動において非常に重要な要素であると思われる。

このような複数の要因が絡み合い、極めて合理的な理由で共同スタジオが増えているのだろうと推測される。近年、発表の場としてのオルタナティブ・スペースが増加しているが、それとこの地域の共同スタジオの違いは、多くのスタジオは開かれたコミュニティを求めるよりも、制作に集中できる環境としてこの場所を選んでいるということであろう。ただし、Art space Kaikas〟のように制作と発表を兼ねるような例もあり、スペース運営が作家の表現手段の一つと考えるスタジオも徐々に増えてくることも予想される。

さて、これまで本市としてもスタジオを紹介してきたが、二〇〇三年の「オープンス

042 art area project 2013 Super Open Studio　24
25　バック・トゥ・ザ・オープンスタジオ

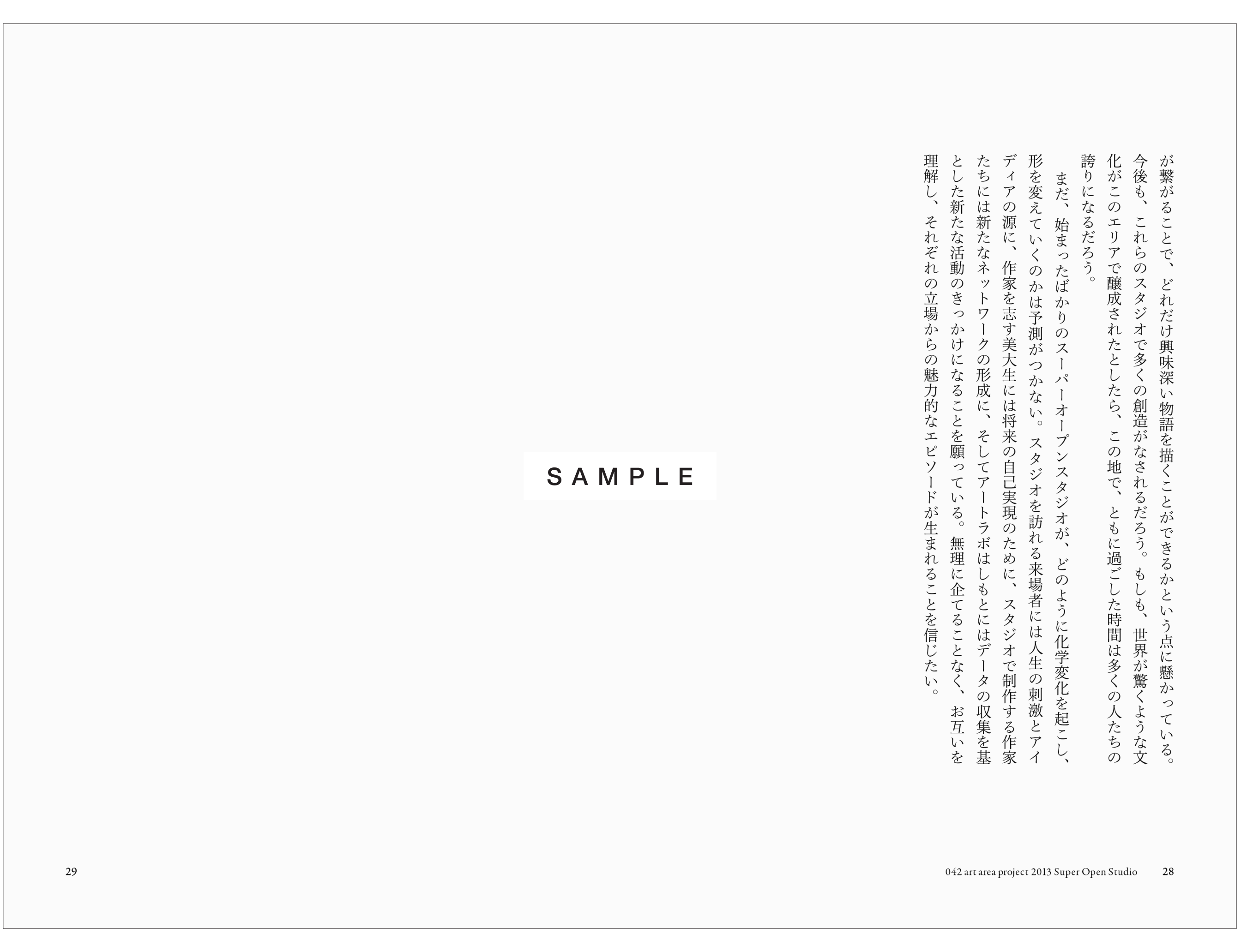


タジオ展」以降、複数のスタジオを取りあげる機会を持たなかったことには理由がある。文化の創造を担う人材が近隣で活動していることは大きな財産ではあるが、それだけ慎重になる事情もあった。スタジオが創造のユートピアであったとしても、彼らには大切な生活の一部でもある。いくら作家が卓越した技術や感性を持ち、表現者として華麗で、幻想的な存在でも、ここでは芸を見せるピエロや魔術師ではなく、鑑賞者と同じ立場の生活者であることも意識しなければならない。これらのスタジオには、国内外に招致されるような作家もおり、制作を続けている。ただし、彼らはやみくもに発表の機会を求めている訳ではなく、仕事を選びながら作家活動を行なっているのである。いまや、全国各地で毎週のようにアートイベントが開催され、作家たちも作品を発表するだけでなく、ワークショップやトークショーなどに参加している。一昔前に比べると、作家自身が表舞台に登場し、参加者などと直接関わる機会が増えている。そうした状況であるからこそ、その機会に向け、閉じられた空間の中で力を溜め込むスタジオという場が重要なのではないだろうか。展覧会などのお披露目が「ハレ」であり、制作現場を「ケ」とするならば、日常的な「ケ」であるスタジオは、「ハレ」の場を演出する上では欠かせない舞台裏であり、重要な意味合いを持つものである。つまり「ケ」としてのスタジオが多くあるこのエリアにおいて、彼らの存在を特別視することなく、私たちとともに持続的な関係性を築くため、調査を重ね、制作現場を公開する「スーパーオープンスタジオ」の構想を慎重に進めてきたのである。

この構想の拠点として、昨年（二〇一二年）オープンした「アートラボはしもと」の存在について触れたい。これまでの相模原市の美術事業は、相模原市民ギャラリーがその多くを担ってきた。しかし、施設の性格上、展覧会の開催が事業のベースとなってしまうため、作家を紹介する方法が作品展示などに限定されていた。一方、展示用のホワイトキューブを持たないアートラボはしもとでは、むしろ多岐にわたる美術活動を行うことが可能となり、作家とアイディアを出し合いながら、オルタナティブ・スペースに近い手法でプログラムを構成することが可能となった。その現場では、作家や美大生、教師や研究者、大人から子どもまで、様々な人々が交流し、一緒に制作にあたる機会が増えてきている。試行錯誤を重ねながらの現場には、作家と人々が夢を語り合う、理想的な未来の姿が重なる。それぞれの居場所を持つ彼らが、もてなす、もてなされるという関係ではなく、ともに共生することが、本当の意味でこのエリアの文化の土壌を築くことになるのではないだろうか。マクロな視点で見ればその構図は共同スタジオの特徴と大変似ている。個々の目的は違うものの、同じ屋根の下で時間を過ごし、時には同じ釜の飯を食いながら、創作活動を続けていく。ものづくりの生産空間を共有しているからこそ、お互いを尊重し、高め合う環境がここにあるのではないだろうか。

一枚の絵を完成させるには絵具の乾きをじっくりと待たなければならないように、文化を定着させるには、大きくなればなるほど、それだけの長い時間と多くの工程が必要になる。しかし、このエリアには、すでにその下地が整いつつある。これからは多くの人々

042 art area project 2013 Super Open Studio　26
27　バック・トゥ・ザ・オープンスタジオ



が繋がることで、どれだけ興味深い物語を描くことができるかという点に懸かっている。今後も、これらのスタジオで多くの創造がなされるだろう。もしも、世界が驚くような文化がこのエリアで醸成されたとしたら、この地で、ともに過ごした時間は多くの人たちの誇りになるだろう。

まだ、始まったばかりのスーパーオープンスタジオが、どのように化学変化を起こし、形を変えていくのかは予測がつかない。スタジオを訪れる来場者には人生の刺激とアイディアの源に、作家を志す美大生には将来の自己実現のために、スタジオで制作する作家たちには新たなネットワークの形成に、そしてアートラボはしもとにはデータの収集を基とした新たな活動のきっかけになることを願っている。無理に企てることなく、お互いを理解し、それぞれの立場からの魅力的なエピソードが生まれることを信じたい。

042 art area project 2013 Super Open Studio　28
29